

## My Diary

[Home](#)[Album](#)[RSS](#)

## 歴史が捻じ曲げられた日に

09 19 \*2015 | 未分類

戦争法案が今日19日の未明、参議院本会議で可決、成立した。70年間(厳密には68年間)、この国を根底から支えてきた憲法第9条が、安倍クーデターによって完全に葬り去られた。ここに至る経過は、みなさんテレビや新聞でご存じのとおりで、ぼくもブログに何度も書いてきたので繰り返さない。

これで政権は、いつでも、どこへでも自衛隊を派遣できるフリーハンドを手にしたので、ということは大手を振ってアメリカと一緒に戦争できるので、改憲論はしばらくは沙汰やみになるだろう。改憲派にとってもっとも邪魔だった9条を、国民投票を経ずして機能不全にしたのだから。

ぼくは昨日とおとといは、昼過ぎから国会前に出かけ、夜の集会が終わるまで法案反対を叫んできた。おととい17日は、朝から終日、激しい雨に見舞われたが、両日も4万人を超える人たちが国会包囲行動に参加した。その中には、徹夜組もたくさんいた。国会に向かう途中、たくさんの徹夜組の人たちとすれ違ったが、とくに高齢の人たちは疲労も濃いだろうに、彼らの表情は一様に明るかった。

SEALDsの学生たちは、連日連夜ほんとうによくがんばった。心から敬意を表したい。参加型民主主義(カウンターデモクラシー)の可能性を、国民各層に向かってその行動をとおして証明してくれた。政権与党が戦争法案を連休前に強行突破したのは、君たちの存在を恐れたからだ。

内田樹がスピーチで言っていたとおり、時折、国会を抜け出して状況報告に来る野党議員に「野党のみなさんも、がんばって」と声をかけるシーンなど、戦後かつてなかったこと。野党を動かしたのも、また君たちだった。

中でも、おとといの夜スピーチした学生・野澤香琳さんの闘争宣言には心を打たれた。SEALDsよ、彼女のスピーチをHPにアップして、全国の学生に拡散してもらいたい。

それと、来年の参院選に向けて、この法案に賛成した戦犯・自公議員全員を落選させる運動を、ぜひ全国的に展開しよう。学生は全国にいるのだから、それぞれの選挙区でこの運動を、工夫を凝らして(つまり選挙違反に問われない範囲で)粘り強く展開してもらいたい。

いや、この運動を盛り上げたもうひとりの主役、60代、70代を中心とする高齢者(ぼくもそうだけど)の方々の健闘も讃えておきたい。どこから指令されたわけでもなく、一人ひとりの判断で立ち上がった無数の市民たちの、戦争法案を許さないという強い意思表示が、この大きなうねりを創り出した。

おとといの夜、SEALDsの別動隊数十人が、1人ひとりハンドマイクを持ち、車道に出て独自にシュプレヒコールを始めた。国会正門前にある中央の簡易ステージからの拡声器をとおした声があったく聞こえなくなった。集会参加者の中から「帰れコール」が起こった。しかし、「仲間割れはやめよう」という年配の方々からの声が複数挙がり、「帰れコール」がすぐに収まるという一幕もあった。

こういうことは、ぼくらの時代にはなかった光景だ。ぼくらの時代は、ほとんどが学生だけの

## INFORMATION

日々の生活を気ままにつづった日記帳。

[RSS](#)[login](#)[Home](#)

## CALENDAR

07   2017.8   09						
S	M	T	W	T	F	S
-	-	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	<b>21</b>	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	-	-
-	-	-	-	-	-	-

## CATEGORIES

## RECENT ENTRIES

- 全メール喪失事件  
2016.06.18 18:06  
[虐待の深層をめぐる④](#)
- 2016.04.05 19:56  
[虐待の深層をめぐる③](#)
- 2016.04.02 12:40  
[虐待の深層をめぐる②](#)
- 2016.04.01 13:19  
[虐待の深層をめぐる①](#)
- 2016.03.30 12:38

## RECENT COMMENTS

## RECENT TRACKBACKS

運動だったから…。高校生から子連れママ、高齢者まで、それだけ幅広い年齢層が集結していた証拠である。昨夜は、ボランティアの女性たちによっておにぎりまで配られていた。歩道の交通整理、ペンライトやブラカードの配布、ごみの片付け、救護チームまで、すべてボランティアの女性たちが担ってくれたこともここに記しておきたい。

もうひとつ触れておきたいのは、有志の弁護士たちによる「官邸前見守り弁護団」の活動である。彼らは「弁護士がその場に沢山いること、共通腕章でそれが視認されること、相互に情報交換し緩やかに連携することで、トラブルの未然防止、過剰警備への牽制、万が一の際の逮捕者支援、証拠保全」のために立ち上がったグループだ。参加者が利用する地下鉄の各駅改札にも腕章をつけて立ち、「気を付けて」と声をかけていた。地味で目につきにくいですが、こういう活動もこれまでなかったことだ。

警察の警備については、みなさんテレビでご覧になったとおりである。8月30日に12万人、9月14日に4万人が国会を包囲し、車道に参加者があふれだしたため、警察はやむなくこの両日、車道を開放した。これをみた「官邸前見守り弁護団」は9月16日、警視庁警視総監に宛てて「午後6時半から10時までの間、国会正門前交差点から国会前交差点までの車道を抗議参加者に開放する」よう求める緊急声明を提出していた。長い声明文だが、その一部を引いてみる。

『そもそも、市民による抗議活動は憲法21条1項「一切の表現の自由」として保障されるどころ、政治的表現の自由は民主主義の生命線であって、国政上最大限の尊重を必要とする。一方、警察による警備活動の根拠法は警察法第2条であるが、その2項が「日本国憲法の保障する個人の権利及び自由の干渉にわたる」ことを禁止しているとおり、その規制は国民の生命身体の保護のために必要最小限度のものでなければならない。とりわけ、本件で問題となる安保法制は国民の権利に大きくかかわる国政上の極めて重要な争点であり、他方、国会周辺は迂回路が多く、道路が封鎖されても車両の通行に対する不利益はさほど大きくないのである。また、同法2条1項は「警察は、個人の生命、身体の保護に任ずる」とその責務を謳っているが、歩道に参加者を押し込めることは危険であり、車道に参加者に開放することの方がかえって参加者の安全確保に資するものである。現に8月30日も9月14日も車道が開放されているが大きな支障はなかったことに鑑みれば、むしろ、最初から国会正門前の車道を開放する方が法の趣旨にかなうと考える』

さて、憲法21条において、「集会、結社及び言論、出版、その他一切の表現の自由は、これを保障する」とされている集会の自由、表現の自由がいま脅かされていることについて書こうと思ったが、長くなりすぎるので今日はここまでといたします。

ひとつだけ余談。17日は雨合羽を着て行ったが、8時間も国会前にいたため濡れるし冷えるしで、困ったのがトイレ。議事堂に向かって右手にある憲政記念館のトイレには100メートルを超える長蛇の列。男子用トイレで用を足すのに15分以上かかるというのは、たぶん初めての経験でした(笑)。

16:04

## 中国って、ほんとに脅威なの？

09 15 \*2015 | 未分類

また政治がらみの話で恐縮です。政治学者でも政治評論家でもないのに、知った風なことを書くとお怒りの向きもあろうかと思いますが、よかったらお付き合いください。

ブログに、戦争法案は参議院では審議未了で決着がつかず衆議院に差し戻されるだろうと書いたが、見通しが甘かった。自公は、17日の参院本会議で強行採決する腹を決めたようだ。

ARCHIVES

2016.06(1) 2016.04(3) 2016.03(4)  
2016.02(1) 2015.09(4) 2015.08(6)  
2015.07(4) 2015.06(9) 2015.05(3)

SEARCH

 GO

審議が参院に移ってから、安倍は急に「中国脅威論」を持ち出してきた。9条の制約を無視して戦争のできる国につくり変えるための法案に、国民の支持が得られないので、法案の正統性を根拠づけるために、つまり「日本をとりまく安全保障環境の急激な変化」を説明するために持ち出したロジックだが、ついに本音を吐いたとも言える。

でも、中国はほんとうに脅威なのか。そうだとしたら、なにが中国の強硬な軍事大国化と海洋覇権を導き出したのか、そこに日本やアメリカがどう関与しているのかを考えてみなければならぬ。

中国が日本を抜いて世界第二位の経済大国にのし上がってくることは、ずいぶん前からわかってきたことだ。その中国が、14億の民を飢えさせないためには、膨大な資源確保を必要とするし、その需要がうなぎ上りに高まっていることも見やすい道理だ。

習近平政権の唱える「一帯一路」というのは、ふたつのシルクロードの建設だ。シベリア鉄道を凌ぐ、ヨーロッパにつながるシルクロード鉄道路線を建設することと、新たな海洋ルートの確保である。ところが、遅れてきた国家が海に出ようと思ったら、台湾以北の東シナ海は他国に出口を塞がれてしまっていた。他国とはアメリカと、その軍事同盟国・日本である。

前にも引いたことのある「悲しき東アジア」のHPを見ると、トップページに日本列島を逆さにした地図が出てくる。この地図では鹿児島のは先は種子島までしか見えないが、ここから台湾（地図では右上）まで、沖縄諸島、宮古列島、八重山列島、そして台湾からわずか100キロの位置にある最西端の与那国島まで、日本の領海（12海里＝22キロ）＋接続水域（12海里＝22キロ）が切れ目なく続いている。

これに、排他的経済水域（200海里＝370キロ）をプラスすると、領海＋接続水域だけで見るとわずかに隙間のあった沖縄と宮古島の間の水域も、日本の領海で埋め尽くされてしまう。

ちなみに、日本の国土面積は世界で61位だが、日本の領海はアメリカ、フランス、オーストラリア、ロシア、カナダに次いで世界第6位である（中国は第9位で、面積は日本の半分）。ここまでは地政学的な制約としても、問題なのは、その太平洋への出口のド真ん中に位置する沖縄に、世界最強の軍隊がのさばっていて、70年間（〔後日付記〕...は言い過ぎ。1949年の中華人民共和国設立後）、ミサイルが中国本土に狙いを定め続けていることだ。

いきおい中国は、塞がれた東シナ海は迂回して、狭い台湾海峡を通って南シナ海に出ていくしか方法がない。いま中国は、アメリカが「真珠の首飾り」と呼ぶ海洋輸送ルートを開拓していて、それぞれの国の港湾建設を援助している。パキスタンのグワダール港からぐるりとインドの西側を回り、スリランカのハンバントタ港を経由してミャンマーのシュトウェ港に至る。ここで原油を陸揚げして鉄道で本国に運ぶ計画だ。ミャンマーから先のルートも開拓中で、一部、既存のシーレーンと重なるが、マラッカ海峡を通って、インドシナ半島をぐるりと回って、南シナ海を経由して本国に至るルートである。

安倍政権の中国脅威論の根拠のひとつである、南シナ海に続々と埋め立て建設中の「砂の万里の長城」と呼ばれる海のプラットホームは、海洋資源採掘目的だけではなく、もちろん軍事的な拠点化の意味があるに違いない。しかし、ただ一方的に中国の軍事大国化を「脅威」だと叫び、いま述べてきたような中国の国家戦略上の制約を勘案して事態をとらえなければ、日本も抑止力＝軍事大国化で応ずるといふ、ファシスト安倍の狙いに同調することになるだけだ。

尖閣諸島だって、都知事だった石原慎太郎が、東京都が島を買い取ると言い出したことで、あわてて民主党政権が国有化したため政治焦点化しただけだろう。「悲しき東アジア」の論者が言うように、無人島だった尖閣諸島はどこの国の領土でもなく、そこを利用していた島のものなのである。あとは、台湾と、中国と、日本で漁業協定を結べばいいだけの話（「悲しき東アジア」の論考をお読みください）。

外務省の役人も、高い給料もらっているくせに、アメリカの意向だけ聞いてなにも考えない

無能なエリート集団であることを脱して、ちゃんと中国と向き合って外交交渉やれよと言いたい。中国との関係改善は、いまもっとも注力すべき喫緊のテーマだとぼくは思うけどね。

沖縄については改めて書きたいが、辺野古移設問題が新たな局面を迎えている。翁長知事が昨日、埋め立て承認の取り消し手続きに入ると表明した。国土の6%しかない沖縄に、米軍基地の74%を押し付けてきた日本政府は、沖縄県民の民意を忖度せず、見くびり続けてきた。中国が、その沖縄に秋波を送っているという噂も耳にする。琉球王朝は、1609年に薩摩藩に強引に編入される以前は、中国と親交を結んでいた独立国だった。このままでは、沖縄は本気で日本からの独立に動き出す可能性がある。

これからは余談である。法政大学の現総長、田中優子の文章を読んで知ったことだが、いま敵対している翁長雄志沖縄県知事と、官房長官・菅義偉は、同じ時代を法政大学のキャンパスで過ごしていたらしい(田中優子も同時代)。ということは、ぼくも同じ時代に同じキャンパスにいたわけだから、どこかでふたりに会っているかもしれない。いま激しく対峙しているふたりの数奇な巡り合わせに、とくに意味はないけれど...

田中優子は、ぼくより一級下で、歴史研究会に所属していたことを、同じ研究会にいた後輩から、ずいぶんあとになって聞いて知った。とんでもない才女だったらしい。元祖「歴女」だが、彼女の専門である江戸時代について書かれた本はおもしろい。初期の本としては、1986年度、芸術選奨文部大臣新人賞を受賞した『江戸の想像力』(筑摩書房)が傑出している。ご一読願いたい。

15:08

## 身体の記憶

09 11 \*2015 | 未分類

7月21日付のブログに「再現される神話」という文章を書いたが、そのなかで4月からオープンした福岡の「特養よりあいの森」を訪ねたことについて短く触れた。施設長の村瀬孝生さんに施設を案内してもらったあと、リビングでいろいろ話をうかがっているときに目撃したシーンが忘れられないので、紹介してみたい。

よりあいの森で暮らしている、ある老夫婦のことである。ここを利用する前はお二人で暮らしていたが、妻が先にぼけてしまい、夫が在宅で支えきれなくなって施設入所となった。妻の認知症はどんどん進行して行って、ということはどんどん若返って行って、いまは娘時代に戻っている。

さて、ひとり暮らしになった夫が寂しいだろうと思って、スタッフが気を利かせて、ご自宅の夫の部屋に、枠のついた妻の写真を飾った。妻の不在が長引き、毎日、写真を眺めているうちに、夫にはこの写真が遺影に見えてきた。夫の認知症も進行し在宅生活が難しくなったので、妻に続いて施設入所となった。夫のなかで、妻はすでに故人である。

そのふたりが、リビングで向き合っている。もちろん、一対一ではなく、お年寄りたちが輪になって座っているちょうど対面に、ふたりが向き合っている。お互いの存在が気になるらしい。不可思議なものを見るような視線が、チラチラと行き交う。どこか、見知った人のようでもある。そういう表情。

ここからは村瀬さんから聞いた話だが、妻に「あの人は誰？ ご主人じゃないの？」と聞くと、「失礼な！ 私はまだ結婚しておりません」と言い張る。同じ質問を夫に向けると、「いいや、もう妻はとっくに死んどります」と言い張る。いま・ここという時間と空間を共有しているのに、今のふたりは他人同士で、まったく隔たった時間を生きている。

不仲になって離婚したというわけではない。最近まで、いっしょに生活し、おそらく半世紀以上いっしょに連れ添ったふたりなのである。

もちろん、ぼくはここで、記憶が障害されると、親しかった者同士でもお互いを認識できなくなって、こんな悲惨で滑稽な運命をたどることになる、などと言いたいのではない。

記憶は脳がつかさどっていると言われるが、それとは別に「身体記憶」というものがある、と仮定してみたい。たとえば、危険な目に遭った体験とか恐怖を味わった体験は、脳だけでなく身体にも記憶され蓄積される。だから、脳内記憶があやふやになっても、身体記憶が稼働して同じような危険を察知し、身を守るようにできている。

ついadenaが、楽しかったり嬉しかった記憶と、苦しかったり悲しかった記憶では、断然、後者が質量ともに強大である。なぜなら人は、というか生命体は、「快を求める」衝動より「不快から逃れる」衝動のほうに強く動機づけられているからである。これも身を守るため、生命史と同じだけ長い歴史がある。

なぜそのことを書こうと思ったかだが、つい先日、何気なくテレビで、人工知能について討論している番組を見たのがきっかけである。そこに、つい先日、又吉直樹といっしょに芥川賞を受賞した羽田圭介が出演していて、彼のコメントがおもしろかったのだ。

人間の脳の活動が電気信号の組み合わせだとすると、それはマシンに置き換えることは可能だろう。しかし人間は、取り換えのきかない身体というハードをもっている。そのことによって、恐怖心が生まれるし、それに付随するさまざまな二次的な感情も生まれてくる。ロボットは、身体が取り替え可能だから、そういう人間っぽい感情は生まれようがない、と言うのだ。

もうひとりのコメンテーター茂木健一郎の話も興味深かった。いま開発されているチャイルドマシンは、自分で勝手に成長するように、ランダムにプログラムされているのだという。そういえば、スピルバーグが監督総指揮したテレビドラマ「エクスタント」には、人間にそっくりで、勝手に成長するイーサン・ウッズという子どものアンドロイドが出てくる。これはもう、SFではなく現実の話になりつつあるのかもしれない。

また、IQ4000というような人工知能も開発途上で、もう賢さの競争では人間はまったく人工知能に歯が立たないらしい。たとえば、人生の岐路に立たされ道に迷ったとき、ロボットに問えば、確かな根拠を示して、どの道を選択すればよいかを明快に答えてくれるようになるのだという。人生を賭けた深刻な悩みに回答を与えてくれたアンドロイドに、やがて恋する人間があらわれるだろう。師弟関係は、恋に転化しやすい。

戦争も、ロボット同士の闘いになる。これは佐藤優の本で知ったことだが、すでに戦争の主役は無人机に代わりつつあるし、イスラエルの最新鋭ミサイルは狙った特定の個人に向かって飛んでいき、顔認証してからその個人のみを殺害するのだという。

30年後、そういうことがすべて現実になったら、どうなるか。もう脳はブラックボックスではなくなるだろう。代わって、羽田の言うように、「取り換えのきかない身体」ということが、新たなブラックボックスになる予感がする。

人間の脳は、まず「死」を発見した。限りある身体をもち、死すべき存在としての自己を発見したあとで、その束の間の人生を生きる意味とは何かを、事後的に考え始めたのだろう。まず身体があり、その上に脳が乗っている。生命というものの、その単純な成り立ちの原初へと、問いは差し戻されていく。

よりあいの森で出会ったご夫婦は、マシンには理解不能なりアリティを生きている。ことばでは認めていないけれど、50年以上連れ添った「取り換えのきかない身体」の記憶が、誤作動をはじめた脳の壁を突き破って、ある親密な感情を生み出しているのかもしれない。そう考えてみると、見つめ合ったふたりは、必死になにかを手繰り寄せ、思い出そうとしているようでもあった。

[付記]この文章は、よりあいの村瀬さんの話に触発されて書いたのだが、多少、脚色があるかもしれない。村瀬さんもこのブログを読んでくれているとのことなので、事実関係に誤りがあったら知らせてください。

18:30

## 憲法改悪までのロードマップ

08 28 \*2015 | 未分類

前回、悪夢のような自民党の「日本国憲法改正草案」についてふれた。またその話か、と言われそうだが、これは「悪夢」ではなく現実に進行していることだし、知っておいたほうがいいと思うので、しばらくがまんして読んでください。

原発だって、「安全神話」を信じ込まされたのか、信じ込みたかったのか(だって1986年にはチェルノブイリで空前の重大事故があったのに!)、その両方だと思うけど、実際に福島で過酷な重大事故(メルトダウン)が起きてしまった。「安全だと言っていたじゃないか」と東電に抗議しても、放射能で汚染され人の住めなくなった大地は元に戻らないし、事故から4年以上たつたいまも、家を追われ県内外へ逃れた非難者数は12万人にのぼっている。

本題に戻るが、現行憲法が骨抜きにされ(主権が国民ではなく国家に変えられる)、大日本帝国憲法に限りなく近づいたファッショ的な「改正」(内田樹は「ここに描かれている国家像は近代市民革命以前のものです」と言っている)は、どんなスケジュールで動いているのか。そのロードマップは、すでに今年の2月に提案され安倍も了承済みだという。このロードマップは、船田元を本部長とする党憲法改正推進本部が策定した。翼賛新聞と化して久しい『産経新聞』の記事から引いてみる。

『今年(2015年)秋の臨時国会で最初の改憲テーマを絞り込み、来年の通常国会に憲法改正原案を提出、参院選後の臨時国会で憲法改正発議を目指す。再来年に国民投票を実施するスケジュールだ。』

原案によると、自民党は、現在の通常国会の会期中に最初に取り組む改憲項目の絞り込み作業を実施。

発議には衆参両院で「3分の2以上」の賛同が必要になるため、自民党内の議論と並行して両院の憲法審査会も開き協議を進める。今年秋の臨時国会で、最初の改憲項目の選定を終える方針だ。

その後は、憲法審査会メンバーや各党協議会などが中心となって改憲項目を条文化する作業に入る。来年1月召集の通常国会で憲法改正原案を提出し、憲法審査会で審議を本格的に開始する段取りだ(『産経新聞』)

つまり来年の参院選までは発議を手控え、選挙結果を見て、改憲勢力が多数を占めれば、来年秋からの臨時国会で衆参両院の「3分の2以上」の賛同を経て、憲法改正を発議するという段取りだ。

発議から、憲法改正の是非を決める国民投票を行うまでの周知期間は2~6カ月とされているから、初の国民投票は遅くとも再来年中の実施になる見通しだという。

とはいえ、6月4日の衆議院憲法審査会では、いま焦点の戦争法案について、与党十次世代の党推薦を含む3人の憲法学者全員が「今回の安保法制は憲法違反に当たる」と発言したことは記憶に新しい。

とくに自民党が推薦し、特定機密保護法には賛成していた早稲田大学教授の長谷部恭男まで「憲法違反」との見解を示したことで、世論の潮目が変わったわけだから、そうスムーズにロードマップどおり進むとも思えないが、油断は禁物だ。潮目は、ひょんなことで逆ブレするかもしれない。いずれにしても、来年の参院選が分水嶺となるだろう。

参院選で自公を大敗させることができればいいが、仮にそうなったとしても、改憲論は必ずぶり返してくる。それに、改憲論の潮流は思ったよりも分厚い支持層に支えられているというのが、いまのぼくの印象だ。格差の拡大と固定化で貧困に追い込まれている多くの若者たち(ほんとうはもっと広い層に及んでいる)は、社会に対するルサンチマンをつのらせている。そ

れがネトウヨたちの差別的な排外主義に組織されていくことはないのか...

ヘイトスピーチを規制する法案が自民、維新の反対で見送られた、と今日の新聞にあった。なんと自民党は、表現の自由を侵す危険があると主張したらしい。なんとというアナクロニズム！

ホソネは、在特会のような団体を野放しにしておきたいのだろう。つまり、なにかという「在日」というスティグマを持ち出すネトウヨたちは、明らかに在特会の影響下にある。若者たちの社会に対する不満や憎悪が、政治批判に向かうことなく、在特会やネトウヨの排外主義に吸い寄せられるなら、それは歓迎したいということだろう。

以前にも書いたことだが、そこに「敵」を代入してあげれば、それは簡単にナショナリズムとして吹き出す。敵とは当面、中国、北朝鮮、韓国、在日である。政権に向かうべき不満を迂回して、ガス抜きとして外部に敵をつくり出し、「反日」という記号を与えてナショナリズムを煽る手口は、すでに中国や韓国にロールモデルがある。

前回のブログで、自民党の「日本国憲法改正草案」を読んで、議論する場を設けてはどうか？ と提案したが、それは普段あまりなじみのない現行憲法をじっくり読む機会にもなると思ったからだ。ほくも今回、「改正草案」と対照しながら読んでみて、これはいい憲法だとあらためて思った。この憲法を換骨奪胎しようという人たちの考えは、「改正草案」を読めば、こちらにもよくわかる。実際の「改正法案」は、もっとオブラートに包まれて提出されるだろうけど...

憲法は、紙に書かれた言葉だから、これを大切にしようという人がいなければ、絵に描いた餅になる。どうせ現行憲法を直すなら、こういう修正をしたらいいんじゃない？ という意見が出てきてもいい。憲法を、もっと身近なものと感じられるようになり、大切に守ろうという人が増えれば、改憲阻止の陣営ももっと分厚くなるに違いない。

故丸山真男、辻清明、鶴飼信成(ともに東大教授)という政治学者たちが、1949年4月に提出した「憲法改正意見」というものがあったことを、歴史学者・色川大吉の本で知った。(『日の沈む国へ』小学館)

『かれらは第1条を「日本国の主権は日本人民にある」と明確化し、天皇を「日本国民の統合の象徴」とするあいまいな表現を捨てようとして提案している。そして、「天皇は国政に関する権能を有しない。ただ儀礼的行為のみを行うことができる」とし、その他の「国事行為」に関する条文を一切削除している』

第9条についてはどうか。

『第1項の「国際紛争を解決する手段としては」を削り、第2項の「前項の目的を達成するためにを」いかなる目的のためにも」と改め、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」とつづけた。これによって解釈改憲に完全に歯止めがかかり、自衛戦争もふくむあらゆる戦争が放棄される』

13:58

## 自民党の「日本国憲法改正草案」のことなど

08 24 \*2015 | 未分類

また政治の話で恐縮です。この夏は、ただ集団的自衛権は憲法違反だとか、9条守れとか唱えるだけではなく、自分なりの論拠を鍛えようと思って、資料を当たったり、関連書を読んだりして過ごした。

まず、この戦争法案は衆議院に差し戻され、公明党も当然賛成にまわり、衆院で3分の2の議席をもつ公で間違いなく可決される。もうこれは第2次安倍内閣誕生以前からの既定路線で、憲法改正までの道のりのワンステップに過ぎない。

2013年から実質的に動き出した日本版NSC(国家安全保障会議)が最初に取り組んだのが特定秘密保護法の立案で、13年12月10日に可決・施行。その後、戦争法案は安保法制

懇での討議を経て、昨年7月の閣議決定へと着々と進んでいく。

ぼくは、昨年の衆院選の結果を甘く見ていた。投票率53%で、比例で自民はそのうちの33%しか獲得していない。公明と合わせても47%だから、過半数に満たない。選挙を棄権した人が半分近くいたわけだから、自民党支持は大雑把にいて有権者の6人に1人だと...。しかし、これは明らかに読み間違い。棄権者は反自民ではない。選挙に行かないことで安倍・自民を信任したのだ。というか、まあ安倍でもいいんじゃない、選挙に行ってまで安倍・自民に反対する理由はない、という立場とみていい。このサイレント・マジョリティをぼくは信用していない。

新聞各社のアンケートでも、安倍支持は急落しているが、自民支持は堅調である。いま問われるべきは、このような政治状況をつくってしまったぼくたちの力不足だし、これからどう反撃の陣形を整えていくかだ。来年の参院選までしばらく選挙はない。戦争法案が成立したら、この圧倒的数的優位な状況が続いている間に、憲法改正までのステップを急ぐだろう。来年の参院選からは、自民支持層が多いと目されている18歳から選挙権が与えられる。

つまり、安倍政権は合法的！に、周りからなにを言われようが戦争法案を力ずくでも通すだろう。もし法案が通らなかったら、安倍の政治生命は絶たれるからだ。というのも、すでに4月27日、戦争法案が通ることを前提にした「日米防衛協力のための指針」が日米安全保障協議委員会(2+2)で了承されているし(新日米軍事同盟)、それをふまえてオバマとの首脳会談に臨んだのだ。

さらに、あろうことか衆議院で審議入りする前に、安倍はアメリカの連邦議会でこの法案を夏までに成就すると「国際公約」した。国会軽視だなんていまさら騒いでみても、今日もやっている参院の予算委での彼の表情や答弁のようすをみれば、ファシスト・安倍の正体は一目瞭然である。

雑誌で読んだ記事だが、安倍に近い雑誌記者たちとの私的な会合で、安倍はワインをうまそうに飲みながら言い放ったそうだ。「集团的自衛権行使のターゲットは南シナ海の中国。この法案は絶対に通す」と。

さて、いまぼくが提案したいのは、人が5人集まったら、自民党が3年前に起草した「日本国憲法改正草案」を読んで、みんなで意見を交わし合うことだ。反戦カフェのようなものを考えてもいいし、飲み会のテーマにしてもいい。要は、広く議論をくりひろげられる場をつくること。

全体で27頁、ネットから簡単にプリントできる。ご丁寧にも、下段に「現行憲法」、上段が「改正草案」で、変更箇所には傍線が引いてあり、どこをどう変えたかが一目瞭然になっている。「新設」条項もたくさんある。とりあえず気が付いたことを書いてみるが、対照してみるといろんな発見があっておもしろい。そういうぼくは、読んであまりのクレージーさに身震いしたわけだけど...

現防衛大臣の中谷元が起草委員会の委員長である。自民党が野党時代につくったものなので、顧問、幹事、委員の顔ぶれはいまの閣僚とは違うメンバー。また推進本部長は保利耕輔、最高顧問は麻生太郎、安倍晋三、福田康夫、森喜朗の4人。

前文からずいぶん変更されていて、読んでいちばん顕著なのは、改正草案の、つまり新しい憲法を起草する主体は国民ではなく、国家だということだ。現行憲法の最初にある「日本国民は...」が「日本国は...」に変更されていることから、この改正案が現行憲法の理念を根こそぎ否定し、あの忌まわしい大日本帝国憲法に限りなく近づいていることは明らかだ。

第1章第1条も、「天皇は、日本国の元首であり...」と、現行憲法の「象徴」を「元首」に変更している。9条は、現行憲法の②をカット、「前項の規定は、自衛権の発動を妨げるものではない」と変わる。そのあとに、「国防軍」についての規定が大幅に新設されている。その4「...国防軍の組織、統制及び機密の保持に関する事項は、法律で定める」、また5では、「国防軍に審判所を置く」とある。つまり、これは軍法会議と軍事裁判所についての規定だ。

「第三章 国民の権利及び義務」では、さまざまな国民の権利を制約すると書いてある。目立つのは、「公共の福祉に反しない」が「公益及び公の秩序に反してはならない」という表現



に変えられていること。明らかに国家による統制を著しく強めようとしている。

問題は、第九章として新設されたのが、総理大臣が発令する権限をもつ「緊急事態」についてである。ものすごく細かく書かれているので詳細は読んでほしいが、緊急事態においては、憲法を停止できるとある。立法・司法権も凍結される。議会の機能を停止して、内閣は「法律と同一の効力を有する政令を制定することができ」、総理大臣は「財政上必要な支出その他の処分を行い...」とある。

つまり早い話、緊急事態だと宣言すれば、時の総理大臣による独裁体制が敷かれ、軍事予算を勝手に使えるのである。ここに至って、議会制民主主義は命脈を絶たれる。

では、なにが「緊急事態」なのかというと、「我が国に対する外部からの武力攻撃、内乱などによる社会秩序の混乱、地震などによる大規模な自然災害その他法律で定める緊急事態...」とある。「社会秩序の混乱」をどのように定義するのか知らないが、ここは「戒厳令」との関係で読み解く必要がある。

つまり、いま立法府をとおして次々と提出され、ろくな審議もされないまま相次いで可決されている法案は、ここをゴールとしている。この行き着くゴールから逆にさかのぼって1つひとつの法案を吟味すれば、いろんなことが見えてくるはずだ。といっても、展開が速すぎて、吟味する時間も与えられていない。それほど敵は急いでいる。

戦争法案の陰にかくれて見えにくいですが、8月7日に衆議院で可決された盗聴法(通信傍受法)もその布石だし、これが拡大解釈されるとどんなに恐ろしいものに化けるかは、かつての社会主義国の実態を見れば明らかだ。東ドイツのシュタージを描いたドイツ映画『善き人のためのソナタ』をぜひ観てほしい。

書いていて、だんだん気が滅入ってきた。しかし、このテーマは引き続き書いていくつもりだ。ひとつお断りだが、8月30日の国会包囲行動には、仕事で駆けつけることができない。その分、これからもブログで発信していくつもりですのでよろしく。

17:17

## 83歳の老詩人のいま

08 17 \*2015 | 未分類

こここのところ政治的なテーマばかりだったので、今回は別のことを書いてみたい。

昨夜のTBSドキュメンタリー番組「情熱大陸」の登場人物は、詩人の谷川俊太郎さんだった。久しくお会いしていないが、精力的に仕事をこなし、元気そうだったのでとても安心した。

この番組のために、谷川さんが書き下ろした詩を、番組の最後に朗読された。戦後70年、83歳の谷川さんにこの国がどう映るかをテーマにした詩。番組を見られなかった人のために、ここに無断掲載する。

### 「日本と私」

私は東京信濃町の慶應病院で生まれたそうだ  
そこは日本という国の一隅だったらしい  
赤ん坊のころは日本語ではない喃語というのを喋っていたが  
長じるに従って日本語を喋るようになり  
やがては日本語を読んだり書いたりするようになって  
有難いことに暮らしが立つようにもなった  
日本が好きかと問われることがあるが返答に困る  
80年以上住んでいる阿佐ヶ谷界隈には愛着がある  
母語の日本語は年取るにつれて好きになってきた  
好きになった女性はみな母語が日本語だった

風景で好きなところはいっぱいあるがこれは日本に限らない  
国会議事堂あたりに漂う日本は好きになれない  
私が日本人のひとりであることは疑えないが  
生き物としての私は日本人である前に哺乳類として分類される  
と そんな呑気なことを言っているのも  
私が兵士やテロリストになる運命を免れているからだろう  
これからの日本がどうなるかと思うことはあるが  
どう出来るかを思うと自分の力不足を痛感する

番組のなかで印象に残ったのは、「人類から戦争はなくならないと思う。そこから出発して考えないと間違う」「子どもは馬鹿じゃない。ほんとうのことを隠さず知らせるべきだ」というコメントだった。

2011年の2月3日から9日まで、つまり3・11の1か月前だが、ぼくは谷川俊太郎さんとインドを旅してきた。参加メンバーは谷川さんと息子でピアニストの賢作さん、鳥取からホスピス医の徳永進さんと介護施設を運営する竹本匡吾さん、宅老所よりあいの下村恵美子さん、村瀬孝生さん、そして毎度おなじみの三好春樹、白濱信義とぼくの、総勢9人。

ついですが、昨年7月に行ったケニアのサファリツアーも、偶然だが総勢9人のメンバーだった。8年前、三好さんが初めて参加したインドツアーは、13人のインド初体験の人たちを引き連れての8日間の旅だったが、いささかtoo muthだった。9人という旅のサイズは悪くない。

さて、この旅は、谷川さんを含む数人で、奄美大島へ一緒に旅をしたときの飲み会の席で決まった。ぼくの提案した仏陀の足跡をたどるインドの旅のプランに、みなさんが賛同してくれて、スケジュールづくりはすべてぼくに一任された。

ぼくの提案は、まずは仏陀が悟りをひらいたブッダガヤの菩提樹の下でみんなで瞑想し、谷川さんにはその瞑想の内容を新しい詩に書いてもらう。その後、仏陀が悟りを開いたのち初めて数人の弟子たちにその内容を説いたサールナートに移動し、生まれたての詩を弟子に見立てたぼくたち旅のメンバーに、仏陀と同じようにストゥーバ(仏塔)の下で朗読するというもの。

「仏陀の言葉は2,500年を経たいまも残っていて、アジア圏の人たちの光明となっています。谷川さんの詩も2,000年くらいは残るかもしれないでしょ。仏陀が悟りを開いた場所に座って、何千年も残る詩を書いてください」と、酔っ払って口説いた記憶がある。

ブッダガヤを訪れる前に、最初に立ち寄ったのはコルカタ(カルカッタ)のマザー・テレサの家だった。ここは、徳永さんのたつての希望で旅に組み込んだ。徳永さんにとって、インドは敬愛するガンジー、タゴール、マザー・テレサゆかりの地だった。

ブッダガヤを訪れたのは二度目だったが、自然が豊かで、大都市観光のあとだと特に、ほっとできる小ぢんまりしたよい街だ。詩作に向かう谷川さんをホテルに置き去りにして、みんなでスジャータの村を訪れた。しかし、車が途中でまでしか入れなかったのも、すでに暗くなったしまった帰路、ぼくたちは田んぼのあぜ道を迷いながら、ほうほうの体でホテルに戻ったのだった。

このときの詩は、のちに岩波書店から刊行された詩集『ミライノコドモ』に活字になって収録されているが、ぼくが持っているのは筆ペンで直筆されたもの。これは、この旅がなかったら生まれなかった詩だと思うと、なんだか感慨深い。最後にその詩を引くので、味わってみてください。

「ガヤの村でゴータマに」 2011年2月5日 谷川俊太郎

生身のあなたを見たかったのだが  
あなたは樹下にいなかった

朽ちかけた経文に隠れ 学者たちの脳の鬚にひそみ  
あなたに代わって菩提樹の下に群がる衆人の  
老病死の不安と恐怖に紛れて  
石に彫られ画に描かれ 言葉に記され続けながら  
ここブッダガヤの朝靄のように  
あなたは無言で桃色に輝いている

生身のあなたに会って見たかった  
出家しようと決意したとき  
どんな言葉でそれを妻に告げたのか  
子どもの寝顔に何を思ったのか  
仏に近づこうとすれば 人から遠ざかる  
その解き難い矛盾を生きることを  
いつどうやって我が身に引き受けたのか  
何年にもわたる苦行よりも  
その行き着いた先の観想を聞いたかった

それとももう声に出せることではなかったのか  
言葉にすることの出来ないものだったのか  
あの樹の下でのあなたの大悟というやつは  
きっとあなたはただそこに座っていただけだ  
何ごとも意味せず何ものにも執着せず  
その無言と穏やかな佇まいが告げていた  
悟りは言葉ではない 日々の行いだと

昨日訪れたテレサと呼ばれる老女の家もまた  
見えない菩提樹の木陰にあったのではなかったか

14:08

## SEALDs観戦記

08 10 \*2015 | 未分類

昨日9日は、横浜であったおむつ外し学会(雲母書房主催)に出かけた。そこで編集者の小川純子さんに久しぶりに会ったら、このブログのファンだと言われた。朝、出勤前にこのブログをチェックして、新しい文章がUPされていたら読んでから出かける。更新されてないのがっかりするとまで言われた。編集者だけに「誤字・脱字が多い」とも…。すごいプレッシャーだ。ほかに、何人かから「ブログ、読んでます」とエールをもらった。なぜか今回、声をかけられたのは女性ばかり。うかつなことは書けない。

さて、7日の夜、国会近くで集会を開いていたSEALDsの学生たちを見てきた。われわれの時代と違って彼らに悲壮感はなく、さわやかで粋でかっこよかった。メインステージから1メートルも離れていない特等席で、rapのライブを堪能した気分。

シュプレヒコール(彼らはただコールと呼ぶ)はrap調だから、自然に体が上下に、前後に動き出す。「集団的自衛権はいらない」「強行採決、絶対反対」「あ・べ・は・や・め・ろ」等々に加えて、女の子たちバージョンには「なんか自民党って感じ悪いよね」というコールが入る。これが耳に心地よく残った。

英語のパートもある。「Show me what democracy looks like.」→「This is what democracy looks like.」。つまり日本語でコールする「民主主義ってなんだ?」「民主主義って

これだ！」の英語表現。

まったく意味がわからなかったのが「No Pasaran!」→「No Pasaran!」。聞き取れないわけ、これはスペイン語。ファシストに対して「奴らを通すな！」と叫ぶシュプレヒコールだと知った。

われわれの時代はダサかったなあ、と一緒に行った三好さんや白濱さんと話し合った。ヘルメットを被り、目からはタオルを巻いて顔を隠す。逮捕されたときに21日間、完全黙秘するために、身分がばれるものは持参しない。逮捕されたら、救援連絡センターとコンタクトしたいとだけ告げる。救援連絡センターの当時の電話番号は03-591-1301。「獄入り意味多い」と覚えたが、これは今もって忘れない。あれからもう45年が経っている。

世界で唯一、デモをしない大学生たちが立ち上がってくれたことは、わくわくするような出来事だ。為政者たちは、管理教育でがんじがらめにして、私的な意見を持たず国家に従順な子羊に育てたと思っていただろうが、あのでたらめな戦争法案なんか通そうとするから、寝た子を起こしてしまった。子羊たちは、もう羊ではなく、すでに虎に変身しつつあるようだ。

SEALDs関西は、週末に神戸で700人の集会を開いた。それだけではない。全国各地で、戦争法案反対のデモが燎原の火のように拡大している。7日、8日、9日に行われた全国のデモをネットでチェックしていたら、ママたちが創価学会本部前でサイレントデモを行ったという記事を見つけた。プラカードには「≡平和主義を覚える？ 公明党に平和を目覚めさせて≡」と書かれていた。こういう、創意工夫はすばらしいと思う。もっと知恵を出し合い、多様なスタイルで抵抗を続けよう。

昨日の懇親会で、これからデモが激しくなると機動隊が前面に出てくるだろうし、やっぱりヘルメットがないとどこか寂しい気がすると言ったら、工事現場で借りていったらどうかという提案があった。「安全第一」と書いてあるから、機動隊も手加減するんじゃないか、と。「頭を下げる絵が入ってるのがいい」という意見も…。そこまで国家権力にへりくだれるか！

8月30日(日)、午後2時から「戦争法案廃案！ 安倍政権退陣！ 8・30国会10万人、全国100万人大行動」が呼びかけられている。7日の「日刊ゲンダイ」に、次の記事が載っていたので採録する。

『安倍周辺が「最後の日曜日」に警戒を強めている。夏休み最後の日曜日(8月30日)、10万人規模の「反安保デモ」が予定されているからだ。もし、10万人が国会を包囲したら、憲法違反の「安保法案」は廃案になっておかしくない。

「安倍官邸はいまからピリピリしています。学生グループ『SEALDs』が毎週金曜日、国会周辺でデモを行っています。参加者は2万～3万人です。10万人が国会周辺に押し寄せたら、革命前夜のような雰囲気になりかねない。台風でもなんでもいいから、デモが中止になって欲しい、というのがホンネです」(官邸事情通)

警察による規制もどんどん強まっている。国会周辺の道路には鉄柵が張り巡らされ、警察官がズラリと並んでいる。デモを行っても、簡単には国会に近づけない。

安倍官邸がデモ潰しに必死なのは、もし10万人を超えるような大規模デモが行われたら、参院での強行採決も、60日ルールを使った衆院での再可決も難しくなるからだ。

「もともと、自民党の参院議員は強行採決はやりたくない。彼らには、良識の府という自負心があります。なにより、1年後には参院選が控えている。選挙の時、野党から攻撃されるのは確実なだけに、世論に敏感になっている。10万人の大規模デモが行われたら、強行採決に二の足を踏むはずですよ」(政治ジャーナリスト・鈴木哲夫氏)』

さあ、もう一步のところまできている。この国の歴史が、政党ではなく、市民の力で変えられる日が…。

## ヒロシマを世界に

08 04 \*2015 | 未分類

70年目の広島への原爆投下の日が近づいてきた。この間、先日亡くなられた鶴見俊輔さんについて、2回ほどブログで触れた。鶴見さんが原爆についてどう考えていたか、いくつか文章を引いてみたい。出典は、上坂冬子との対談本『対論・異色昭和史』(PHP新書)

「もともとはドイツに先んじられたら大変だということで、アインシュタインがルーズベルト宛に手紙を書いた。ルーズベルトはそれを受け入れ、マンハッタン計画を立てて原爆を造る。しかし、その後、1945年5月にナチスは崩壊する」  
「ドイツはもう原爆の研究どころではなかったはず。そういう段階で日本にいったい何ができるか。アメリカは高度撮影で日本の実態を知っていたんだよ。主な兵器工場が全部破壊されて兵器の追加なんてもうできないことを。連合艦隊も壊滅したところに、どうして原爆を落とす必要があったのか」

ところが、大統領になりたてのトルーマンは、大統領直属の統合参謀本部付きの幕僚長の強い反対を押し切って、原爆投下のゴーサインを出す。そのほかに、物理学者たちの、民間人の暮らす大都市ではなく、たとえば東京湾に落として威力を見せ付けられればよいではないか、という助言もはねつけられた。

「(前略)原爆は戦争を止めるための手段ではなく、一気に不法に片付け仕事として戦争を終わらせたんだ。早く勝ちたいために。なのにアメリカの大統領は、今日に至るまでに誰一人として『我々は取り返しのつかない大罪を犯しました』と世界に向かって正直に詫言を言わなかった」(同書)

戦後、アメリカは一貫して原爆投下を正当化し続けてきた。それ以外の方法で戦争を終わらせることはできなかった。本土決戦になれば、アメリカ兵数万人の犠牲が出た、というのが言い分である。

しかし、沖縄戦直前から始まった本土への無差別空襲で、仙台、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸ほか、本土の主要都市は壊滅状態だったはずだ。非戦闘員である膨大な都市住民を殺傷してもまだ飽き足らず、2発の原爆を落としたことは、どう考えても許しがたい暴挙である。

いま定説となっているのは、1945年2月の米英ソ三国のヤルタ会談で、スターリンがルーズベルトとチャーチルに一度取りつけた日本への参戦を、アメリカが危惧しけん制したというのが、原爆投下の理由とされている。ソ連が満州に侵攻する前に、日本を降伏させ戦争を終わらせるという戦略。

それに、日本の真珠湾攻撃のすぐあと始まったマンハッタン計画には、のべ50万人、20億ドルの予算がつき込まれていた。1943年には製造のめどが立ち、1945年7月16日、ニューメキシコ州での実験成功で、通常爆弾の4,000倍の威力をもつことがわかり、実際に試したくなったということではないか。せっかくならば膨大な予算を費やして作ったのだから使いたい。ウラン型とプルトニウム型の2発まで作れたから、広島だけでなく、もう1発どこかに落としたい。小倉が標的だったが曇っていて市街地を目視できなかったから、長崎に変更した…。

これに対して戦後日本の政治家や官僚たちは、日本の被害を直接、アメリカに抗議することを避けてきた。そればかりか直接、アメリカに抗議しようとする市民活動を阻止してきた。ポーズとして反核、非核を唱えながら、アメリカの核の傘の下に入るという国家戦略。それが、70年間続き、ついに軍隊(まだ自衛隊)を出して、アメリカと一緒に戦争する法案が正念場を迎えているというわけだ。

この夏、どの本読もうかなと考えている方に、池澤夏樹の『カデナ』(新潮文庫)をお勧めしたい。1968年の沖縄を舞台とした、ある意味でスパイ小説だ。詳しくは書かないが、それぞれ複雑な出自をもつ3人の登場人物が、米軍の北爆についての機密書類を盗み出し、ハノイ

に暗号化して打電するという筋書き。当時の沖縄の海には、ソ連と中国の疑似漁船がいて、爆撃機の出撃をレーダーで捕捉しハノイに伝えていたらしい。それより早く、機密をハノイに知らせることができれば、どこに爆撃機が向かうかを事前にキャッチし、迎え撃つことができる...

そのなかに出てくる青年、タカの姉の恩師として登場する「知花先生」は、このブログに再三登場していただいた鶴見俊輔がモデルらしい。その意味でも、ぜひ紹介しておきたかった。

もうひとつ、例の新国立競技場のドタバタ劇についてひとこと触れておきたかったが、次回に回す。この国の国家プロジェクトが、だれも責任をとらない戦前からの無責任体質を踏襲している格好のケースだからだ。戦争もそのように始められ、「なんとなく決まってしまった」「ほんとうは乗り気じゃなかった」と、あとから当事者たちが言い訳するのだろう。こんな連中に国のかじ取りを任せて、ほんとうにいいのだろうか。

それにしても、東京五輪組織委員長の元総理、森喜朗という人物は笑える。タテマエというものがなく、本音しかない人。今度のザハ・ハデイドのデザインについて、「ドロッと垂れた生ガキのよう」「実は好きじゃなかった」と発言した。ことほど左様に、総理大臣時代は失言オンパレードだった。なかでも秀逸なのは、以下のエピソード。ネットから記事を拾った。暑気払いに、森クン笑劇場をご堪能ください。この国の王様は、みんな裸なんである。

「ワシントンを訪問した際に同行していた新聞記者が、首相に入れ知恵をしたそうです。「クリントン大統領に会ったらまず、『How are you?』(調子はいかがですか)と言って握手をすれば「クリントン大統領は『I'm fine, are you』(上々です。あなたはどうですか)と答えるでしょうから、『Me, too』(私もです)と応じてください」

ところが本番、森首相は「Who are you?」(あなたは誰ですか)と切り出した。

クリントン氏は苦笑しつつも、そこは百戦錬磨の大統領、「I am Hillary's husband.」(私はヒラリーの夫です)と切り抜けた。

しかし、われらが森首相、筋書き通り「Me, too」と断言。さすがのクリントン氏も絶句、同席者は顔色の変化が見て取れたという。こうして始まった首脳会議はギクシャクしたものとなったようです』『森総理の大いなる失言集』(インターネットより／筆者不明)

14:44

## 行動する哲学者

08 01 \*2015 | 未分類

このホームページを作ってくれた白濱くんが、メンテのために事務所に立ち寄ってくれた。鶴見俊輔さんの話になった。ぼくは、生身の鶴見さんに会ったことはないが、彼は、鶴見さんに会っている。ベ平連(若い人は知らないだろうが、「ベトナムに平和を！市民連合」というベトナム戦争に反対する反戦平和運動団体があった。鶴見さんはその発起人。代表は小田実)のことに話が及んだ。

白濱くんは、若いころ米軍基地のある岩国にいて、活動家だった。当時、基地の近くに「ほびっと」という反戦スナックがあって、彼はそこにも出入りしていた関係で、ベ平連の活動家たちとも付き合いがあった。当時、ベ平連は、アメリカ軍の脱走兵をかくまい、国外への逃亡のサポートなどもしていた。岩国で開かれたなにかの集会に、鶴見さんが現れたのだと言う。

白濱くんはその後、デモのため上京して、池袋で逮捕される。これ以上のことを書いていいのかわからないので、彼にちゃんと聞いて、許しが出たら書くことがあるかも知れない。

アイドルの追っかけみたいだが、SEALDsの若者たちを見たいという話になった。SEALDsは毎金曜日に、戦争法案反対の集会を開いている大学横断的の学生組織。学生た

ちが声を挙げ、果敢に行動している姿に触れて、オールド左翼として連帯の意思表示をした。

8月7日、国会前に行くことにした。しかし、白濱くんは主義として携帯をもたない。去年だったか、ボブ・ディランのコンサートでもはぐれた。待ち合わせ場所と時間を、ちゃんと確認しなければ、と思う。

行動する哲学者であった鶴見さんの業績は、ベ平連の活動だけではない。それはほんの一面にすぎない。小熊英二の追悼文が、鶴見さんのプロフィールを上手に紹介しているので、ちょっと引いてみたい。

『鶴見は「優等生」を嫌った。優等生は、先生が期待する答案を書くのがうまい。先生が変われば、まったく違う答案を書く。教師が正しいと教えた「枠組み」に従う。

その「枠組み」には、共産主義や国家主義など、あらゆる「主義」が該当する。「日の丸を掲げないのは非国民だ」「マルクス主義を支持しないのは反革命だ」といった枠組みを、鶴見は生涯嫌った。彼はその対極として、「作法」や「党派」から自由な、大衆文化や市民運動を好んだ。

鶴見にとって、枠組みを疑う懐疑と、ベトナム反戦や憲法九条擁護の運動は、矛盾していなかった』（朝日新聞）

これも鶴見さんの一側面である。ちなみに、小熊英二の改訂新版『日本という国』（イースト・プレス）は中学生向きに書かれた良書である。彼の主著である『〈民主〉と〈愛国〉』や『単一民族神話の起源』（どちらも新曜社）は500～1,000頁にも及ぶ大著なので、この手軽な本はおすすめ。ぼくは、この本を中学生の社会科の副読本にしてほしいと、前から主張している。

鶴見さんは、日米開戦のあと戦争捕虜収容所に入れられるが、留学先であったアメリカから交換船で日本に帰ってくる。その後、インドネシアのジャカルタで海軍武官府に軍属として勤務する（ちなみに、ぼくの父と鶴見さんは大正11年生まれと同じ年。父は陸軍だが、同じ時期にジャカルタにいたことになる）。

鶴見さんの仕事は、夜にアメリカや連合国側の短波放送を聞いて、毎朝、小さな新聞をつくることだった。なぜなら、大本営発表は連戦連勝という虚報だらけで、作戦立案の役に立たないからだった。それは各艦隊の司令長官と参謀長宛に送られる、限定部数5部くらいの新聞だったという。

ある日、鶴見さんは脱走を考える。その文章に胸を打たれたので引いてみる。時に鶴見俊輔、19歳。

「夜中にラジオ放送の途絶えたとき、官舎の外に出ると、遠くからガムランの音楽が聞こえた。村の暮らしては、夜中になると涼しくなって、小さい子も出てきて団欒の時間がある。軍隊からはなれてその一座に加わりたかった。かくまってはもらえるだろう。しかし何日続くだろうか。この島は陸軍の占領地域で、陸軍の憲兵が法律を守っている。これに対して、何日もかくまってはもらえない。

脱走は夢だった。この夢に、他人の脱走を助ける役割をとおして近づくことができたのは、それから24年たって、ヴェトナム戦争から離脱する米国兵をかくまう「ベ平連」の活動に参加したときである。私にとっては、それは年来の夢が実現したのであって、突然の決断ではなかった」（『思い出袋』岩波新書）

そうなのだ、若者たちよ。戦場とはそのような場所なのだ。10代後半から20代の若い君たちよ、戦争になればそのような状況に立たされる。その異国は、仕事で訪れた先ではない。まして旅行で出かけた先でもない。戦争とは、鉄の軍律にしばられ、もし敵前で逃亡すれば、味方から射殺されるかもしれない苛烈な世界なのだ。

さて...、これから仕事で新潟に向かわなければならない。中途半端だが、鶴見さんについては、いずれまた書く機会があるだろう。再見！

14:24

## 鶴見俊輔さんのことから

07 28 \*2015 | 未分類

哲学者で評論家、社会運動家でもあった鶴見俊輔さんが亡くなったことを24日の新聞で知った。「戦後思想の巨星、墜つ」の感をぬぐえない。メディアには追悼の記事が踊っているし、これから出る月刊誌にもその功績を讃える論考がたくさん掲載されることだろう。

ぼくも訃報を受けて鶴見さんについて文章を書きかけたのだが、うまく言葉が定着しない。なにかを書けたという気がしないのだ。もちろん、1回で書ききる必要はないのだから、迂回戦術に切り替える。

おとといの日曜日は、14時からの国会包囲行動に参加した。反原発のデモには何度も参加し、呼びかけ人にもなったが、戦争法案に抗議する集会は初めてだった。主催者発表で25,000人。どんどん参加者があふれ出し、地下鉄国会議事堂前駅は身動きのとれない状態になった。昨日の新聞で、同時刻、渋谷で若いママたち2,000人のデモが行われていたことを知った。

ふと、その前夜に訪れた隅田川の花火大会の見学者のことが頭をかすめた。今年のごとは知らないが、昨年の花火大会の見学者は80万人だったという。その80万人が国会を取り囲んだら、安倍を退陣に追い込めるのにと、すぐにその考えを打ち消した。

多分、18か19歳だった頃のある日、学内で開いた集会デモの参加者がめっきり少なかったことがある。そのとき、友人と交わした会話がよみがえってきた。大学のすぐそばの後楽園球場には、いまこの時間に3万人の観衆がいるんだよね、と寂しそうに言うから、それは違うとぼくは反論した。来たくても来られない事情を抱えている者がこの10倍以上いるんだ、今日参加できたオレたちは幸運なんだ、と言い張った記憶...

先日亡くなった鶴見俊輔さんは、だんだん参加者の減っていく平連のデモ参加者を見て、今日もこんなにたくさん集まってくれた、と心から喜んだという。鶴見さんには、たとえ1億人にそっぽを向かれ、たった1人になっても自分は信念に基づいて行動することを止めないという覚悟があった。鶴見さんの思想の、あのしなやかな強靭さはどこから生まれてきたのか、それを考えたくて書き始めた原稿は、いま途中で頓挫している。

原発事故のあとの1カ月間、ぼくはそれまで味わったことのない無力感に苛まれ、孤独だった。どんなに身近な人にも、このことは相談すべきことではないと思った。これは自分の内部の問題だから、自分のこれまでの生き方を検証して、ひとりで方針を出さなければならない、と。最初に考えたのは、福島県の子ども全員を即刻、西日本に避難させること。それをメールに書いて友人や知人に送り続けた。子ども手当の予算を全部、それにつぎ込め、と。

おとといの集会に参加して感じたことは、どこから組織動員されたわけでもない多くの1人ひとりの市民やグループが、自分の意思で集まったということ。鶴見さんなら、この状況に絶望してるヒマなんてないでしょう、と言うだろうな。プラカードも、旗も持参していない人が大半だった。唯一、見かけた旗は「九条の会」の旗だった。鶴見さんや故・加藤周一さんたちが立ち上げたこの会には、こんなにたくさんの支部があるのかと思った。

スピーチを行ったのは、香山リカ、鎌田慧、山口二郎、佐高信という顔ぶれ。山口さんは「この炎暑とわれわれの熱い怒りで、安倍を焼き殺そう」と発言した。こんな過激な政治評論家だったのか、とちょっと見直した。佐高さんは、「創価学会内部では、公明党と戦争法案をめぐって軋轢があると聞く。平和を唱えてきたあなた方に、ただひとつ良心の道が残されている。それは、公明党が野党に下ることだ」と苦渋のラブコールを送った。ぼくは、創価学会という宗教団体や公明党という政治党派に期待はしない。そこに所属する個人1人ひとりが自



分で考え、決断することだからだ。

政党からは、昨日から審議が始まった参議院議員の発言が相次いだ。民主党の蓮舫さんは、戦争法案を廃案にするための議席数が足りない、国会を取り囲んでいるみなさんの力が必要ですと訴えた。

確かに、いまぼくたちは、自民党が政権に返り咲いてから、二度の衆院選で自・公を大勝させてしまったツケを払わされている。しかし、今度の戦争法案を通してしまったら、そのツケはもう払いきれないだろう。

仮に安倍が退陣しても、自民党は次には憲法改正→核武装を視野に入れている。自民党の改憲案では、自衛隊は国防軍と名を改める。

議会で廃案にできないなら、残るは直接行動である。60年安保では、30万人を超える学生、労働者、市民が国会を取り囲んだ。安保の強行採決と引き換えに、岸内閣は退陣した。安倍は、まさか祖父の二の舞を踏むとは考えてはいまい。

ならば、アメリカとの心中を画策し、日本人の命運を握っている岸→安倍ファミリーの野望を打ち砕いてやるしかない。いま、戦後民主主義の力量が問われている、とほんとうに思う。

ぼくたちは戦争法案廃案→安倍内閣退陣を視野に、この暑い2カ月を闘い抜いていかなくてはならない。

この戦争法案を契機として、人と人の新しい結びつきが日本全国に広がっている。これまで沈黙していた個人や団体が声を挙げ、行動し始めている。時限つきだが、まだ希望はある。いや、その先の闘いまで含めると、いのちある限りの長期戦になる。

先ブログで、「鎮魂の夏」にしたいと書いた。しかしいま、前言を撤回し、それを「闘いの夏」と改めたい。

13:54

[newer](#)

[older](#)

page [1](#) [2](#) [3](#) [4](#)

[HOME](#) [RESET](#) [△](#)

My Diary | Script by Web Liberty | Skin: wmks | [login](#)